

# 2003年(第14回)福岡アジア文化賞 市民フォーラム

## 記憶と忘却の政治学 「フィリピンの戦争から「帝国」を考える」

レイナルド・C・イレート

【日 時】 2003年9月21日(日) 13:00～15:30

【会 場】 アクロス福岡イベントホール(福岡市中央区天神)

### 【プログラム】

趣旨説明・出演者紹介

清水 展(九州大学大学院比較社会文化研究院教授)

基調講演

レイナルド・C・イレート(学術研究賞受賞者)

パネルディスカッション

レイナルド・C・イレート

池端 雪浦(東京外国語大学長)

有馬 学(九州大学大学院比較社会文化研究院教授)

清水 展



## 基調講演

フィリピン南部では現在、米国の支援を受けた政府軍と、モロ・イスラム解放戦線ひきいるイスラム分離独立運動派との間に激しい戦闘が行われています。現在の国際政治の言説において、このミンダナオとスルーにおける戦いは、世界的な「テロとの闘い」の一部であると考えられています。この戦いに関してはフィリピン人の意見は分裂しており、グロリア・アロヨ大統領とテオフィスト・ギンゴナ副大統領とでさえ互いに意見が異なり、特に米軍参加問題についての意見が相違しています。本日の講演で、私はこのテロとの闘いに関するフィリピン人の立場が、過去の戦争についての集合的記憶によって、いかに影響を受けているかということをお話したいと思います。

現在でもフィリピンという国に、亡霊のように存在するこれらの過去の戦争とは、いったいどういうものなのでしょうか？ 最初の戦争はスペインからの独立戦争で、非常に記憶に残るものでした。1896年に、カティプーナと呼ばれる秘密結社がマニラ郊外でスペインの支配に対して反乱を起こした際に始まりました。カティプーナが大きくなるにつれ、この反乱はフィリピン分離独立運動派とスペイン政府との間の大きな戦争に発展していきました。

対スペイン戦争は勢いを増し、1898年のフィリピン共和国政府の設立に至りました。しかし、このフィリピン政府設立直後の1899年には米国が介入し、これを崩壊させようとしてきました。そこでフィリピン人の記憶に残る第二の「大戦」、つまり比米戦争になったわけです。この苦しい戦いによって、ほぼ50万人のフィリピン人が死亡しました。この戦争は、1902年7月4日の米国の勝利宣言をもって公式に終結したのでした。

米国は1902年以降にフィリピンを統治した時に、1899年から1902年の「本来の戦争」がほとんど忘却された出来事になるように徹底しました。40年間にわたる米国の支配期間中に、教育を受けたフィリピン人は、母国の将来は米国との特別で恒久的な関係に依存すると考えるように育てられたのです。

しかしながら、この安穏としたな関係は、1941年12月に日本軍がフィリピンを征服しようと到着したときに試練を受けることになりました。そこでフィリピン人の記憶に残る第三番目の「大戦」、つまり1942年から1945年までの抗日戦争になったわけです。これはフィリピンと米国が協力して日本による占領に抵抗するというものでした。

抗日戦争が終わるとすぐに、フクスの反乱が1947年に勃発しました。フク団とは共産党が率いるルソンの農民軍でした。過激派左翼が率いるフク団やその他の運動に対する闘いは、世界的な「冷戦」の一部をなしていました。冷戦の終結が宣言されたのは、つい最近のことですが、そのすぐ後にテロとの闘いが始まったのでした。

現在のテロとの闘いに先立つものとして、1896年に始まった対スペイン独立戦争をはじめとする4つの大戦がありました。そこで私は、テロとの闘いに対するフィリピン人の姿勢が、いかに過去の戦争についての記憶の政治学を反映したものであるかを説明したいと思います。

第一の戦争、つまり対スペイン戦争は、集合的記憶に深く刻まれています。実際にこの戦争は、フィリピン人が1896年の革命と呼ぶものですが、国民国家の形成にとって「基礎となる出来事」でした。この最初の戦争の記憶なくしては、国民国家はその国民にとっては何の意味もなかったことでしょう。

1896年から98年の戦争は根源的なものでした。なぜなら、このときに初めて「フィリピン人」という名称が、この島嶼地域の住民に用いられたのです。ここに住むスペイン人のみならず、最も重要なことに、現地の人々もそう呼ばれました。さらに、フィリピン人のアイデンティティという概念が、1898年の独立共和国の時期には、政治的な形を与えられるようになりました。

対スペインの独立戦争で指導力を発揮した知識人と軍事指導者たちは、「最初のフィリピン人」と呼ばれました。我々の国民的英雄たちのほとんどは、この最初の戦争の際に出現した人々です。ホセ・リサル、アポリナリオ・マビニ、アンドレス・ボニファシオ、エミリオ・アギナルドなどです。彼らは教科書の中に「建国の父たち」と記載されることによって記憶されてきました。その記憶を強化するために、彼らの行いを称える記念碑が建てられ、彼らの誕生日は国民の祝日となり、その肖像が切手や看板や雑誌の表紙や市役所や町役場などに刻み込まれました。

いかに対スペイン戦争の集合的記憶が20世紀に形成されたかは、この戦争を、その後の比米戦争と結びつけたときに初めて理解することができます。第一と第二の戦争には密接な相互関係がありました。しかし、第一の戦争は記憶され、第二の戦争はほとんど忘却されてしまったのです。

米国は、1898年5月に自らの対スペイン戦争を宣言したときから、第一の戦争に関わってきました。米国海軍アジア艦隊司令官のジョージ・ドゥイー提督は、ふたつの方法でフィリピン反乱軍を支援しました。最初はマニラ湾でスペイン艦隊を打ち破り、次にフィリピン人指導者のアギナルドを彼が亡命生活を送っていた香港からフィリピンに連れ戻したのです。それからアギナルドは自らの軍隊を再編成し、ルソン島内陸部でスペインの守備隊をひとつひとつ攻め落としました。そして、彼は1898年6月12日にフィリピンのスペインからの独立を宣言したのでした。

事実上、フィリピン人は対スペイン独立戦争を米国の支援のもとに勝利しました。アメリカ人は、最初はフィリピンをスペインの専制支配から解放したのものとして歓迎されました。1898年後半にはフィリピン政府も米国政府も、スペイン植民地時代を暗黒時代と表現しました。カトリック教会によって自由な思想が抑圧された時代としたのです。スペインに勝利した後、フィリピン人は自らの国民国家が米国によって承認されることを期待しました。なぜなら、米国も少し前に自らの独立をイギリスから勝ち取っていたからです。

しかしながら、米国の解放者たちは、フィリピンという同盟国をどうするかについては、別の考えをもっていました。1890年代までには、米国は国内の残虐な南北戦争から完全に立ち直っていました。大陸を横断する西部開拓も完了し、イギリス、フランス、オランダなどからなる帝国列強の一員となることに熱意を燃やしていたのです。太平洋が彼らにとっての勢力拡大地域であり、フィリピン諸島は米国がアジア大陸で交易を成立させ影響力をふるうための踏み石でした。また、フィリピンの農産物や天然資源を搾取して利益を得る面もありました。したがって、米国が望んでいたのはフィリピン

をスペインから引き継ぐことでしたが、フィリピン人は、闘うことなしに米国に自国を明け渡す気はありませんでした。

第二の戦争、つまり比米戦争が始まったのは1899年2月で、米軍がマニラで、米軍とフィリピン軍を分ける境界線を越えたときでした。その戦争の最初の1年間に、米軍はルソン中部及び北部でフィリピン防衛軍の主力部隊を鎮圧しました。その次の年にはルソン南部に集中的に戦力を投下し、1900年半ばまでには主要都市を支配するにいたりました。この時点でフィリピン人の抵抗はゲリラ戦の様相を呈してきたのです。

1901年4月にアギナルド将軍が捕らえられた後も、また新たな米国の支配者に協力し始めるフィリピン人が増えてきた後でさえも、その後1年間はゲリラ戦による抵抗は続きました。1901年の終わりまでには、サマール、レイテ、イロコス、タガログ南部などの地域で、米軍は全面攻撃を行いました。村人を疎開させたり、家屋や食料を焼き払ったり、捕虜を拷問したり、ゲリラの掃討作戦を行ったりしたのです。戦闘での負傷や飢餓、自軍兵の脱走、米軍の圧倒的な銃火器の脅威などのため、残存ゲリラの指導者たちも降伏せざるをえませんでした。

私の妻の祖父であるペドロ・カランダンが比米戦争に関わるようになったのは、1900年にバタンガス州タナウアンが米軍に占領された後に、その市長に任命されたときでした。しかし、彼は勤務時間中しか米軍に奉仕しませんでした。その他の時間で上司の目が届かないときは、ゲリラ部隊に食料や金銭や情報を提供し、町への秘密の出入を助けてました。米軍はそのことを発見し、彼を逮捕して終戦まで収監したのです。

私自身の祖父であるフランシスコ・イレートは、マニラの北にあるブラカン州のゲリラ軍司令官で友人のイシドロ・トーレス将軍に、米軍情報を提供することにより戦争に参加しました。米軍は祖父がトーレスに1900年に送った手紙を途中で奪い、彼が敵方のスパイであることを突き止めました。しかし米軍が彼を逮捕したかどうか私は知りません。

結局祖父がどうなったかを私が知らない理由は、驚くべきことに私の祖父も妻の祖父も戦争の記憶を子や孫に伝えなかったからでした。彼らはそういった記憶を個人的なものとして保つことを選び、子どもたちには、まるでその対米戦争がなかったかのような人生を送らせたのです。しかし彼らは、対スペイン戦争の記憶は子どもたちに伝えました。リサールやボニファシオや、スペインからの独立を宣言したアギナルドについては自由に語り聞かせました。しかしマルバルやルクバンや、1900年に米国に対するゲリラ戦を呼びかけた別のアギナルドについては沈黙を守ったのです。

このふたつの戦争の記憶が選択的に継承されていることは、どう説明できるでしょうか？ 米国は、1902年7月4日にフィリピンに対して勝利宣言をした後で、1896年から1902年の長きにわたる戦争についての集合的記憶を作り変えてきたのです。この記憶の政治学の目的は、対スペイン戦争の記憶を保つことを奨励し、対米戦争を忘却させることでした。これは報道検閲や市民の儀式、特に植民地学校教育制度を通じて実行されたのです。

なににもましてアメリカ人がフィリピン人に記憶してほしいのは、自分たちがスペインの抑圧的支配から彼らの国を自由にすべく解放者としてやってきたということなのでした。これは、最初には本当のことでした。確かにフィリピン人はアメリカ人を「解放救済者」として歓迎しました。しかし、解放者ならば、フィリピンの共和国政府を認めなかったことを、どう正当化できるのでしょうか？ また、米国のフィリピン諸島接収に対するあらゆる抵抗に、残虐な抑圧を行ったことを、どう正当化できるのでしょうか？ スペインの専制政治から救い出したはずの人々を解放者が殺戮したことを、どう正当化できるのでしょうか？ 一方の被抑圧者にとっては、米国の1898年にフィリピンに来たことの意味は、単にもうひとつの外国からの侵略にすぎませんでした。それがスペインの退却の直後に起きただけのことだったのです。

そのような否定的な意味付けと闘って、ふたつの戦争について公式の記憶を確立するために、米国植民地政府は以下のことを行いました。

まず、1896年の対スペイン独立戦争指導者たちの自由主義的大志を顕彰しました。米国は特にナショナルリスト知識人のリサールの思想を推奨しましたが、彼は、民衆教育にもとづいた、より緩やかな自治への道を好んだ人物でした。第一の戦争のもうひとりの英雄であったボニファシオは、武装闘争を提唱する秘密結社を率いたために、政府から軽視されました。

次に米国政権は、アギナルドとフィリピン知識階級の共和国建設の大志を顕彰しました。しかしながら米国は、1898年の段階ではフィリピン人には民主主義と自治の準備ができていなかったと主張しました。その「証拠」として、米国の文献ではアギナルドは独裁的な大統領として描かれ、フィリピンの民衆は地域の実力者に盲従しているとされました。植民地政権が望んだのは、公立学校で学ぶ新世代のフィリピン人が、1898年の米国の来訪を「友愛的同化」として記憶することでした。また、フィリピン人が民主主義と責任ある自治政府を確立できるよう彼らを助けるために、必要とされるかぎり自分たちがフィリピンに留まることでした。

前述のことに続いて第三番目に、米国の占領に対する抵抗は「大いなる誤解」であるとみなされました。実際これらは、教育長であったデービッド・バロウズが高校用教科書で比米戦争を説明する際に用いた表現です。もしフィリピン人が、米国の崇高な動機を十分に理解し、自分たちが米国の優れた文明によって向上させられるべき発展途上の国民であることを受け入れていたならば、決して米国の占領には抵抗しなかったであろうし、悲惨な戦争も起きなかったであろうと彼は述べました。

最後に四番目として、米国植民地政府は1902年に法規命令を出し、米国の駐留に対して反対し続ける者は、誰であろうと扇動罪で逮捕され、政府軍を攻撃する武装集団は、強盗集団、狂信的宗教集団、ゲリラ軍の敗残兵とみなされるとしました。彼らは単なる犯罪者やテロリストとして処遇されるのでした。この戦争は、外国の占領に対する抵抗としてよりも、むしろ強盗や狂信主義、無秩序、混乱の時代として記憶されることになったのです。

学校でよい成績を修めるために、また植民地政府の役人として職を得るために、そして米国がもたらした近代的なやり方を会得するために、フィリピン人は米国植民地政府が規定するとおりに比米戦

争を「記憶」するようにしむけられていきました。したがって、公教育制度の中で教師として採用された際に米国による占領を受け入れた私の祖父が、自分の戦争の記憶を子どもたちに伝えようとしなかったのも理解できることです。

一般民衆の記憶の形成に対する米国植民地支配の影響が最も効果を発揮したのは、学校においてでした。英語が広がるにつれ、過去についての公式見解も普及していきました。しかしながら、集合的記憶を公的に管理することによって、比米戦争の個人的記憶を完全に包み込んでしまえたわけではありません。結局のところ、無数のフィリピン人が反帝国主義闘争に巻き込まれ、数多くの人々が殺され傷つけられていたのです。比米戦争の退役軍人の多くは、自分の記憶を生き続けさせることを選びました。退役軍人協会や愛国者同盟、労働組合、多くは違法であった政治宗教的セクト/団体をつうじて、彼らは記憶を保ったのです。ふたつの戦争に関する公式記憶のかたまりの奥底には、このような別の記憶のあり方を見出すことができるのです。

別の記憶の焦点のひとつは、第一と第二の戦争の軍人であったアルテミオ・リカルテでした。学校教師として訓練を受けたりカルテは、対スペイン戦争で軍隊司令官となり、対米戦争では将軍に昇進しました。その戦争が終結したとき、彼は米国への忠誠を誓うことを拒否して収監されました。しかし彼はなんとか脱出し、最初は香港へ、後に横浜へと逃走しました。これらの亡命地からリカルテは、対スペイン戦争と対米戦争の記憶が生き続けるように努力し、両者をひとつの未完の出来事としてとらえました。彼は1904年から1935年まで、フィリピンを米国から解放するために彼が帰国するのを待つ数多くの秘密結社や農民運動に啓蒙を与えました。

このような流れの中の第三の戦争であるフィリピンと日本との戦争を理解するためには、その前のふたつの戦争との関連を考える必要があります。フィリピン革命派は、対スペイン戦争と対米戦争においては、常に日本からの支援を求めていました。しかし少量の武器を船舶輸送した以外は、日本がフィリピンに関わってきたことは、ほとんどありませんでした。しかし、1902年に米国がフィリピンで勝利を収め、それに続いて1905年に日本がロシアに重要な勝利を収めたことが、アジア太平洋地域支配における日米間の競争開始の合図となったのです。

アジアの大国としての日本の勃興には、アメリカンスクールで英語を学ぶ新世代のフィリピン人ですさえも気付かざるをえませんでした。フィリピンの愛国者たちは、崇敬すべきリカルテが横浜をベースにしていたという事実によってもまた、日本を発展の別のモデルとしてみようという意識を高めるようになりました。そこで、1942年に日本がリカルテを伴ってフィリピンを占領するためにやってきたときには、日本を解放者として歓迎したフィリピン人も少しはいたのです。

しかしながら、大多数の人々は日本を侵略者とみなしました。日本の占領に対する米国とフィリピン共同の抵抗は、1903年以降の学校教育において普及した歴史の植民地的構築を前提としたものでした。この歴史観においては、フィリピン人は米国の支援を受けてスペインを打破したのであり、自治政府を将来もつことができるようにフィリピン人を訓練するために、米国人はフィリピンに残留したことになっていたのです。1930年代までには、大多数のフィリピン人は比米戦争のことはすでに忘却してしまっていました。

彼らは、自分たちの運命が米国の運命と絡み合っていると考えたのです。そのため日本軍は、到着した際には侵略者の軍隊以外の何者でもないといみなされたのでした。バターンとコレヒドールにおける米比軍の敗退の後で、抵抗のためのゲリラ戦が、いつまでも行われました。それは実際に、ほとんど比米戦争の再演ともいえるものでした。

大日本帝国政府は、フィリピン人に第一と第二の戦争の歴史を再度思い起こすように奨励し、それによって自らの占領を正当化しようとした。独立戦争の英雄たちすべてが、青少年の模範として賞賛されました。比米戦争の記憶を掘り起こすことは、もはやタブーとは考えられなくなったのです。このふたつの戦争の退役軍人と彼らの子孫たちで、米国が侵略者としてやってきたことを決して忘れなかった人々は、過去について自由に語り、日本政府を支える各種団体に指導的役割を果たすように奨励されました。

日本に対する主要な「協力者」の背景や思想を検討してみると、忘却された対米戦争との結びつきが見出されます。ホセ・ラウレルは、1943年の共和国大統領ですが、バタンガス州の出身で、そこは1902年に米軍の武力攻撃で壊滅的被害を受けた地域です。彼の父は米軍の強制収容所で死亡し、いとこは米軍部隊と遭遇して殺されました。内務長官のクラロ・レクトは、タヤバス州のゲリラ指導者であった彼の叔父を追跡する米軍将校に、母親が泣きながら尋問を受けていたことを記憶しています。エミリオ・アギナルド元将軍は、1943年10月の独立記念式典で名誉をたたえ、共和国は1898年の夢を実現したと祝いました。

これら戦時の共和国の指導者たちは、日本という後援者には特に愛情をもっていませんでしたが、米国の支配に対しても、たいして懐旧の情を感じてはいませんでした。彼らは、対スペイン戦争や対米戦争、抗日戦争を、外国の支配に対する抵抗という同じテーマが変化したものとして記憶していたのです。彼らの目的は、帝国列強間の紛争には含まれたフィリピンというクニの存続なのでした。

もし日本による占領が、より長期間にわたっていたならば、米国がおこなったのと同様に、一般市民の記憶の再構築が生じたであろうことは疑いようありません。比米戦争の記憶が忘却のかなたから再度よび起され、米国は侵略者として記憶され、おそらく日本は解放者とみなされるようになったことでしょう。しかし、ダグラス・マッカーサー将軍が敗北して退却する際に「私は必ず戻ってくる」と重々しく宣言したとおりに、日本の専制支配からフィリピン人を解放するために、米軍は1945年に戻ってきました。このときをフィリピンの歴史では「解放」と呼んでいるのです。

米国が後援するコモンウェルス政府がマニラで再度設立されるとすぐに、戦時に消滅されつつあった集合的記憶を回復する努力がなされました。たとえば1945年の演説でオスメニャ大統領は、マッカーサー将軍によるフィリピン解放を、その父親のアーサー・マッカーサー将軍が1898年にフィリピンをスペインの支配から解放すべくマニラ入りしたことになぞらえました。オスメニャ大統領が都合よく忘却していたのは、アーサー・マッカーサー将軍が1900年にフィリピン共和国を戦闘で敗北させた米軍部隊の司令官だったということでした。

抗日戦争の最後の6ヶ月は、対米戦争の最後の6ヶ月と非常に似かよっていました。家屋や建物は

破壊され、ゲリラを支援しているとの疑いをもたれた一般市民は拷問を受け処刑され、日本軍の退却行程では大きな被害がもたらされました。その間にも米軍機が空から攻撃し破壊を与えたのです。戦争末期の数ヶ月についての個人的記憶は、ほとんどの場合、悲惨で悲劇的なものだったのです。

オスメーニャ、ロハス、キリーノといった戦後の大統領たちは、抗日戦争はフィリピンと米国の兵士がフィリピンを防衛するために共に闘い苦しんだ時代だとする公的記憶を推進しました。この公式見解が演説やラジオ放送や学校制度を通じて喧伝され、米国による植民地時代は平和と繁栄を謳歌した黄金時代だったと記憶するようにフィリピン人は奨励されたのです。この幸福な時代は、日本軍がやってきて、この国を暗黒時代に落とし入れたときに破壊されました。その暗黒がようやく取り除かれたのは、解放者であるマッカーサーが戻ったときだったのです。解放とは、失われていた米国のもとでの幸福な時代を回復するということでした。約束どおりに米国は1946年7月4日にフィリピン人に独立を与えたのです。

そのような公的記憶を確立するのは困難ではありませんでした。日本軍による死と破壊という無数の個人的記憶と調和したからです。この公的な過去の構築においても、またもや比米戦争が起きなかった出来事とされたことに注目すべきでしょう。比米戦争は忘却するようにしむけられたのです。

しかしながら、米国の占領に対するフィリピン人の抵抗を、誰もが忘却できたわけではありませんでした。特に日本による占領の際には、むしろその記憶が奨励されたからです。この戦争時代に、ナショナリスト知識人の新しい世代が育ちましたが、その中にはテオドーロ・アゴンシーリョやレナート・コンスタンティーノのような歴史家がありました。彼らにとっては、対米戦争も抗日戦争も両方とも平等に記憶すべき戦争だったのです。

比米戦争を忘却しない有名な組織のひとつが、フクバラハップ、つまり「抗日人民解放軍」でした。これは抗日戦争時代に設立され、自らを対スペイン戦争と対米戦争を闘った軍隊の後継者であるとみなしていました。その指導者の多くは、第一と第二の戦争の退役軍人家族の出身でした。1946年の「独立」は、ごまかしであると過激なナショナリストは考えていましたが、その「独立」の後で、このフクバラハップは共産党に率いられ、米帝国主義とその従属者であるフィリピン人に反対する人民解放軍へと自らを変容させました。これがフィリピンにおける冷戦の始まりだったのです。

この冷戦については、あまり詳細に語るつもりはありません。これは世界を左派と右派に分け、一方は共産主義が他方は資本主義の超大国が率いたものでした。私が特に強調したいのは、この冷戦の間に過去の戦争の記憶が形成され、その時代の切迫した政治的事情に適合するように記憶が構築されたということです。

前述のように、戦争直後のロハスとキリーノの政権は、抗日戦の比米共闘を強調しました。この戦略はフィリピンと米国の連帯を強化する目的をもっていました。これはフクバラハップと共産主義者を対象としていましたが、彼らはソ連と協力して米帝国主義を批判していたのです。しかし、ラウレルと日本軍協力者の多くが1948年に恩赦を受けた後で、また冷戦が1950年代に激化してくるにつれて、抗日戦争の記憶は次第に公的記憶の中から薄らいでいきました。結局のところ、日本は冷戦の頼りに

なる同盟国であり、日本からの賠償金も支払われる見込みがあったのです。抗日戦争は冷戦時には公式には忘却されました。しかし個人的には、その時代を生き抜いた人々、つまり私の父の世代の人々によって暗黒時代として記憶され続けたのでした。

冷戦時に記憶を作り上げていた人々にとって、本当の闘いの場は比米戦争の記憶構築でした。自分の経験を若い世代に伝えることができる退役軍人は、ほとんど残っていませんでした。もちろん政府は一貫して、その戦争が公的に忘却されるように努めました。つい最近行われた1998年の革命100周年記念祝典の際にも、米国の激しい侵略についての言及はほとんどありませんでした。対米戦争を記憶することで、冷戦時代からの同盟関係を傷つけかねなかったからです。

それにもかかわらず、比米戦争の記憶を一般市民の意識の中に再生させようと積極的に発言する活動家グループによって、公式見解は挑戦を受けるようになりました。そういった政治家や知識人には、クラロ・レクト、テオドロ・アゴンシーリョ、レオン・マリオ・ゲレロ、レナート・コンスタンティーノ、セサル・マフルなどがいました。過去について新植民地主義的理解をするよりも、むしろフィリピン中心の理解を普及しようと、ライセウム・スクールを設立した戦時大統領のホセ・ラウレルでさえ、その一員でした。彼らの中には日本占領期に共和国に務めていた人々もいました。1950年代と1960年代に、彼らが再教育運動を行った結果として、教育を受けたフィリピン人の中に、比米戦争の「抑圧された記憶」について学ぶものが増えてきました。その戦争についての新たな集合的記憶が、特に若い人々の間で確立されるようになったのです。

対スペイン戦争の集合的記憶も、冷戦時には対立の土壌となりました。カトリック教会を含む反共産主義派は、知識人のホセ・リサルを革命の英雄として支持し続けました。一方、ナショナリスト過激派は、労働者階級出身でカティブーナンの創設者であるアンドレス・ボニファシオを推奨しました。マルコス大統領は、学生運動家によるボニファシオ崇拜を非難し、自分自身をエミリオ・アギナルドになぞらえました。（ちなみに、この人物が1897年にボニファシオの処刑を命令したのです。）対スペイン戦争について、なにを記憶すべきかということに関しては、冷戦時には数多くの激しい対立が生じ、これは現在でもとても終わったとはいえない状態です。なぜラモス大統領は自分をアギナルドになぞらえたのでしょうか？なぜエストラダ大統領は、自分をボニファシオのように描いたのでしょうか？明らかに彼ら是对スペイン戦争の集合的記憶を利用しようとしています。しかし、彼ら是对米戦争の記憶を再生することには熱意はもっていないのです。

過去四回の戦争をめぐる記憶の政治学についての探求は、テロとの闘いという現在の戦争において、フィリピン人がいかなる立場とるのかを理解するのに役立つと思います。2002年の初めに、テロとの闘いを政府が遂行するのを支援するために米軍兵士がフィリピンに戻った際に、グロリア・アロヨ大統領率いる大多数のフィリピン人は、腕を広げて彼らを歓迎しました。フィリピン人は米軍兵士を同盟軍として、さらには抗日戦争における自分たちにとっての解放者として記憶していたのです。ごく少数の人々だけが、米軍の帰還を、1898年に米軍が武力でフィリピンを占領しようとやってきた姿に重ね合わせて過去の亡霊のこだまを見ることができたのです。ほとんどのフィリピン人は、イラク戦についての報道記事を読んでいます。そこに自国の1899年の経験が鏡のように映し出されているのを見ることができません。彼ら是对米戦争についてほとんど忘却しているのです。

現在ではテロに対する闘いにおいて、私たちは自分の陣営を明らかにするようにせまられています。ちょうど冷戦時のように、どちらかの陣営を選ばなければなりません。「味方か、さもなくば敵か」と警告を受けているのです。援助を必要とする貧しい国であるフィリピンは、もちろんテロと闘う陣営の連合国に加入するように強制されています。しかし、単に貧困や現実主義だけでフィリピンがその方向へ導かれているわけではありません。ここに見えるのは、過去の戦争についての集合的記憶の、数世紀にもわたる操作あるいは再構築なのです。過去の侵略、過去の傷、そして連合国自体のテロ行為に関して、大規模な忘却が行われている上に、テロとの闘いは構築されているのです。

モロ反乱軍が犯した「テロ」に疑問を抱くことなく闘うということは、南部のイスラム教徒を分離独立戦争へと駆り立てた過去の不正義を忘却するということを意味しています。フィリピン軍部隊とともに闘う米軍部隊の姿は、抗日共同戦線の記憶を呼び起すかもしれませんが、それはまた必然的に、抗日戦争と同じくらい悲惨であった比米戦争の忘却を伴うものとなります。フィリピン人は、ただ現在の帝国に奉仕するようになるだけのために、過去の戦争を闘ってきたのでしょうか？ 集合的記憶を集成し守護するという機能を、もし歴史学が発揮しようとするならば、それは現在の戦争にも関わっていかねばなりません。その戦争の目標を是認するためではなく、その根本的理由を究明するためにです。あらゆる次元において過去の戦争を記憶することによって、また帝国の影に隠された記憶を再生することによって、私たちはようやく現在の戦争の終結を見始めるべきなのだと思います。

本文は、第14回福岡アジア文化賞学術研究賞受賞者 レイナルド・C・イレート氏の基調講演の原稿を掲載しています。